

成果報告書

I. 研究概要

氏名	ミチコヴァー・ルビツァ (Lubica MICKOVA)
所属	スロヴァキア・コメニウス大学・文学部・東アジア研究所・日本学科 (助教)
招聘回 (招聘期間)	第5回 (2010年10月1日～2011年5月31日)
招聘研究テーマ	日本語とスロヴァキア語の「依頼・断り」の言語行動における配慮・婉曲表現の比較研究
研究目的	本研究の主な目的は、日本語とスロヴァキア語の「依頼・断り」の言語行動における配慮・婉曲表現の使用に差異があるかを見出し、具体的な差異を把握することにより、スロヴァキアの日本語教育へ示唆することである。

研究概要：

研究の動機と目的

文化が異なれば言語使用も異なると考えられる。スロヴァキアの学習者が日本語を使用する際に、自国の文化的背景を日本語発話に持ち込むことで、日本人よりも直接的な表現を選ぶ傾向が見られる。それは日本語らしくない日本語の発生につながり、場合によってはコミュニケーション・ギャップを起こす原因にもなりうる。

そこで、スロヴァキアの学習者やノンネイティブ教師が、より日本語らしい日本語を習得するためにはどうすればいいのかを考えた結果、日本語の配慮・婉曲表現に注目することが必要だという結論に達した。配慮・婉曲表現は様々な言語行動に見られるが、本研究では、日本語とスロヴァキア語の「依頼・断り」における配慮・婉曲表現の比較に焦点を絞って考察していく。本研究の目的は、母語場面を比較し、日本語とスロヴァキア語の「依頼・断り」の言語行動における配慮・婉曲表現の使用に差異があるかを見出し、具体的な差異を把握することにより、スロヴァキアの日本語教育へ示唆することである。

研究課題

目的を達成するためには、本研究をさらにいくつかの小研究に分け、丁寧に分析していくことが必要である。「依頼」と「依頼に対する断り」は、会話として成り立つ、まとまったやりとりではあるが、機能の観点から見れば、「依頼」と「断り」という二つの言語行動が含まれているため、別々に見ていくことにした。「依頼」にも、「断り」にも配慮・婉曲表現の使用が見られるが、スロヴァキアの日本語学習者の言語使用を観察すると、「断り」の方が習得しにくいようであるため、まずは「断り」の分析を優先した。また、「断り」を成している弁明、断りの述部、謝罪と代案という四つの要素に注目し、以下のように課題を立てた。

- ① 日本語母語話者 (JNS) とスロヴァキア語母語話者 (SNS) の「依頼に対する断り」に差異があるか。
 - 1-1. JNS と SNS の「依頼に対する断り」における弁明と断りの述部に差異があるか。
 - 1-2. JNS と SNS の「依頼に対する断り」における謝罪と代案の使用に差異があるか。

研究方法

本研究では、ロールプレイの質的な談話分析という研究方法を用いた。社会言語学の領域の研究であるため、具体的な場面と人間関係を予め設定した上でデータを収集し、分析を行った。

◇調査対象者の関係設定

研究成果を「ビジネス日本語」という科目で活かせるように、場面を職場に、人間関係を同僚同士に設定した。関係の統一性をできるだけ保つため、同僚同士の年齢がなるべく近く、関係も親しく、上下関係がほとんど生じないように設定してある。また、上下関係または年齢の差が生じた場合は、先輩または年上の人を常に依頼者に、後輩または年下の人を断り手に設定した。上下関係と年齢が矛盾した場合は、上下関係を優先した。

◇ロールプレイの内容

・依頼者 (A) 夕方です。あなたは仕事に追われています。締切は明日の朝です。どうしても締切までに終えなければならない仕事ですが、間に合いそうにない状況です。あなたは困っているので、同僚に手伝いを頼んでみることにします。

・断り手 (B) 夕方です。あなたは職場にいます。今日はプライベートで人と会う約束があるので、なるべく早く帰りたいと思っています。帰る前に同僚に声をかけられ、手伝いを頼まれます。話を聞いて、なるべく自然に断ってください。(必ず断ってください。)

◇調査の対象者

JNS30組(男性15組、女性15組)及びSNS30組(男性15組、女性15組)を対象に、2011年の5月に日本の、6月～7月にスロヴァキアの首都圏の職場でデータ収集を行った。

研究結果

論文では詳細に執筆しているが、ここではJNSとSNSの断りにおいて見られた差異を簡単にまとめる。

・JNSとSNSの断りの弁明に見られた差異

言語的な側面から見ると、依頼を断る際に、JNSは抽象的な理由を優先するか、最初は抽象的な理由を使用し、必要に応じて具体化するという傾向が見られた。それに対し、SNSは抽象的な理由も使用するが、JNSに比べると、最初から具体的な理由で断る場合も比較的多い。また、文化的な側面を考えると、日本の職場では、私用が相手の依頼を断る理由になりにくい、スロヴァキアの職場では、私用も断る理由になりうる、というJNSとSNSの私用に対する意識の差がうかがえた。

・JNSとSNSの断りの述部に見られた差異

JNSは直接性の高い「できない」類(例:「残ることはできない」、「だめだ」、「まずい」など)の述部より、「できない」度合いを低減する表現(例:「難しい」、「厳しい」)や、「できない」と表現しない言い回し(例:「今日はちょっと…」類)などを優先する傾向があるのに対し、SNSは直接的な「できない」類を多用する。

・JNSとSNSの断りにおける謝罪と代案の使用に見られた差異

JNSにおいてもSNSにおいても、謝罪と代案が断りを和らげる配慮表現として機能しているが、JNSは謝罪を多用するのに対し、SNSは代案を優先するようである。この差異は特にJNSとSNSの女性に著しく見られた。また、断り手の談話の構造を前部・中部・後部に分けて、謝罪と代案を断りのどの部分で多用するかを分析すると、JNSは断りの後部で謝罪を使用するのに対し、SNSは同じところで代案を多く用いた。

展望:

将来的には、収集したデータをもとに、JNSとSNSの「依頼」の仕方を分析することを今後の課題としたい。また、配慮・婉曲表現の観点から、依頼に入るまでの前置きの言葉にも注目していきたい。さらに、言語表現ではないが、「断り」においては、パラ言語表現(フィラーなど)及び非言語表現(沈黙など)も重要な役割を果たしていると考えられる。そこで、収集したデータをもとにこれらの表現も詳しく見ていきたいと考えている。

冒頭にも述べたように、本研究の主な目的は、スロヴァキアにおける日本語教育への示唆である。いくつかの小研究の結果を授業で活用することで、コメニウス大学が提供する日本語コミュニケーションに関する科目(主にビジネス日本語、日本語会話)の教授法の水準を向上させたい。さらに、長期的な目標として、コメニウス大学東アジア研究所日本学科一同でスロヴァキアの学習者を対象とした日本語教科書を作成する際に、本研究の結果を反映したい。